



「とにかく世の中は褒めてくれる人より、けなす人の方が多いものだ」という意味の「褒めて千人、悪口万人」ということわざがあります。子育てにあてはめてみると「善いことをしたときには、善くて当たり前なのであまり褒めず、善くないことをしたときは、親の思いと異なるために目に付きやすく、叱る数が多くなる」などと言い換えてもよいかもしれません。もちろん、このように叱ってばかりではよくないことは言うまでもありませんが、目に止まりやすいことからその場の感情ですぐに叱ってしまい、失敗してしまうという経験も少なからずあるのではないのでしょうか。

「褒めて育てよう」と言われるように褒めることは、子どもに自信や信頼感などを持たせ、健やかに成長していくきっかけとなります。そ

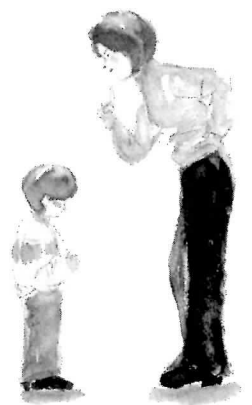


して、叱ることは、自律させていくためにも大変重要な事です。しかし、叱られるということは子どもにとっても心穏やかなことでありません。ですから怒りを感じさせたり、反抗心を持たれたりするのは、逆効果です。褒めることと同様によりよい成長のきっかけとなるように上手に叱りたいものです。

そのためには、いくつかの「コツ」があります。感情的になり怒ることはあまり効果的な方法とは言えません。まず声の大きさに気を付け、小さな声でゆっくりと叱ってみてはどうでしょうか。小声でゆっくりと叱ることで、大人は冷静になり子どもに「じっくり聞かせる」ことができます。そこでの子どもの反応を考えながら話す言葉は当然のように説得力が増す内容となることでしょう。

また、ガミガミではなくポイントを決めて短く叱ることが大切です。ぐちぐち叱っていると叱られていることを聞き流すようになってしまうことがあります。厳しく叱る時と優しく叱る時の基準を持ち、よくないことをきちんと指摘し、毅然とした態度で叱りましょう。もちろん、短く済ませるために、問答無用とばかり体罰を行うのは最も下手な叱り方で、悪影響の方が多いことは、言うまでもないことです。

同じことを叱るにも言葉を換えてみることも効果的です。同じことを言われ続けると慣れてしまいます。「早く寝なさい」ばかりだけでなく「明日つら



いよ」勉強に集中できないよ」など、直接的に言わない言葉を見つけてみてはいかがでしょうか。

更に、叱る順序も考えたいものです。叱ってから褒めるより、褒めてから叱る方がよい場合があります。褒めることでやる気や自信を起こさせますので、その後失敗を指摘しても、乗り越えられる気持ちや受け入れようとする心構えができるからです。

他にも「叱らない叱り方」という視点でも考えてみたいものです。「こうしたい、こう思う」と親の考えを提案したり「どうしたらいい」と判断を促したりするのもその方法の一つでしょう。また、親の失敗談を話したり、できないことは一緒にやっていこうとしたりすることも大切なことです。

これら述べたことはほんの一例で、さまざまな見方を持つて叱ることが必要です。叱ることも褒めることと同様に大切なことです。褒める時は思い切り感情を出していいでしょうが、叱る時はそうはいきません。そのような時、ふっと立ち止まり、直球勝負ではなく、ときには変化球を交える工夫をしてみてはいかがでしょうか。

平成20年4月から 後期高齢者医療制度が スタートします

これまで

は、75歳(一定の障害がある人は65歳)以上の人は国保や健保組合などの医療保険制度に加入しながら、「老人保健制度」で医療を受けていましたが、平成20年4月からは新たに独立した医療制度となる「後期高齢者医療制度」で医療を受けることとなります。



この制度は、都道府県ごとの「後期高齢者医療広域連合」が運営主体(保険者)となり、保険料を決めた医療の給付などを行います。また、市町村では保険料の徴収と窓口業務などを行います。

現在、準備作業を進めておりますので、詳細につきましては、今後の広報などを通してお知らせします。

問合せ先

市民生活課 国保医療担当
山梨県後期高齢者医療広域連合
055(236)5671